

## 第2章 益田市の概要

### 1. 自然・地理的環境

#### (1) 位置・交通条件

##### ア. 位置

益田市は、島根県の西端にあって広島県、山口県と接し、北は日本海を臨み、南は中国山地の稜線が連なっています。

主要都市との直線距離は、島根県の県庁所在地である松江市とは約 140 km(市庁舎を起点としての距離。以下同)、山口県山口市とは約 64 km、広島県広島市とは約 65 kmとなっています。

また、日本列島と大陸・朝鮮半島との関係でみると、日本海は内海のような地理的構成となり、九州北部から島根県、特に石見地方にかけては、朝鮮半島に最も近い地域となります。

なお、益田市の面積は 733.19 km<sup>2</sup>で、島根県の総面積 6708.24 km<sup>2</sup>の約 1 割を占め、県内で最も広い市町村です。



図 2-1 益田市の位置 (日本全域)

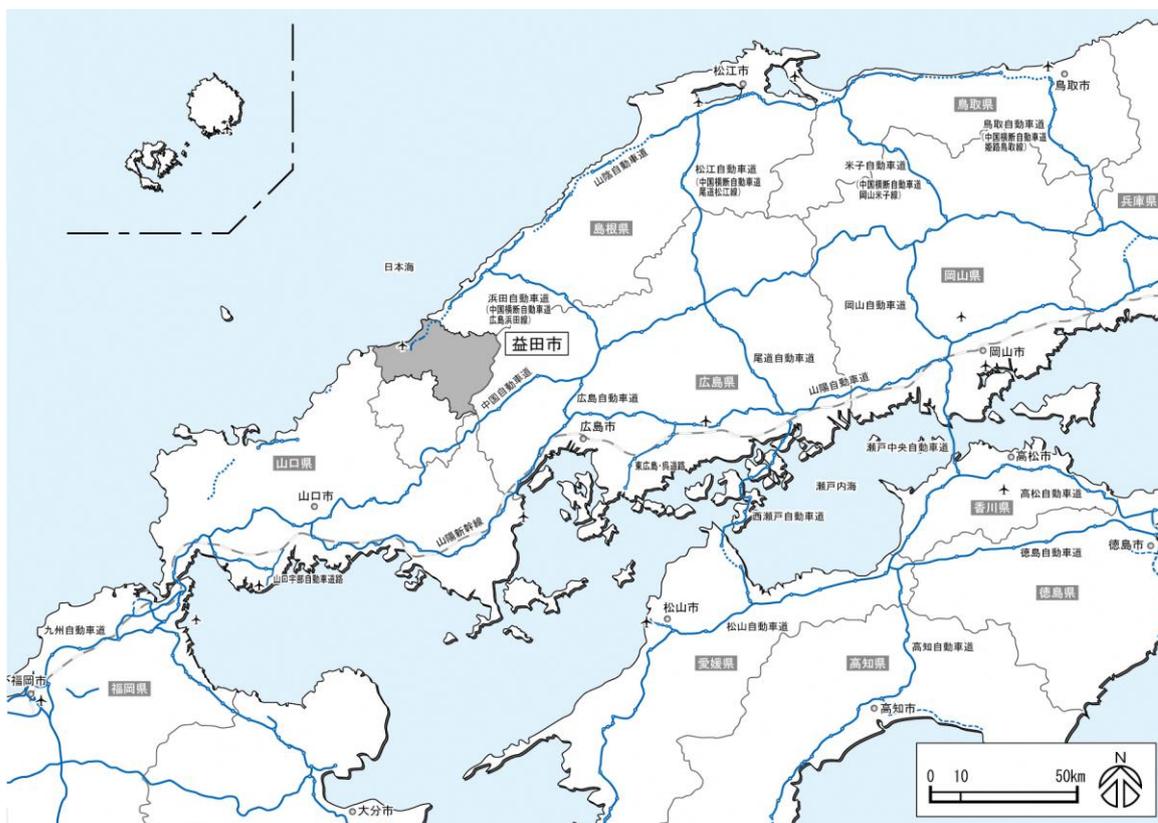


図 2-2 益田市の位置(中国地方)

資料：国土交通省中国地方整備局管内図(平成 30 年 4 月現在)

## イ. 交通条件

益田市の主要な交通基盤は、道路(バス、自動車等)、鉄道です。JR山陰本線は、ほぼ海岸線に沿って走り、東から松江市、出雲市、浜田市など島根県内の主要都市を結んで益田に至ります。一方、JR山口線は益田市から内陸部を進んで津和野町、山口市へと向かいます。

国道9号は、山陰地方を東西に結びます。一方、国道191号は、益田市以西では山陰本線に沿っていますが、益田市中心部で国道9号と交差して以降は内陸部を通過し、益田市美都町・匹見町、広島県北広島町<sup>きたひろしまちょう</sup>を經由して、同県安芸太田町戸河内<sup>あきおおたちょうとごうち</sup>で中国自動車道に接続します。また、国道488号は益田市横田町を起点とし、匹見川沿いを進み匹見町匹見から広島県廿日市市吉和へと通じていますが、近年は落石の危険のため、通行止めとなっています。

県庁所在地である松江市は県の東端部に位置し、西端に位置する益田市との距離は約175kmあり、JR山陰本線の特急で約2時間、自動車では国道9号等を利用すると約3時間半を要します。同様の経路で、出雲大社のある出雲市へは、特急で約1時間半、自動車では3時間弱を要し、世界遺産石見銀山遺跡のある大田市へは、特急で約1時間10分、自動車では約2時間を要します。

一方、他県の都市部からは比較的アクセスが良く、所要時間は山口市からはJR山口線特急または国道9号を利用して約1時間半、萩市からはJR山陰本線または国道191号を利用して約1時間15分、広島市からは浜田自動車道・国道9号を利用して約2時間半(約150km)で到達します。また、広島市から匹見町(「道の駅匹見峡」付近)までは、中国自動車道(戸河内IC)、国道191号を經由すると約1時間30分となり、さらに、益田市役所付近までは、約2時間15分(約120km)となるため、移動距離と時間は浜田自動車道経由よりも短くなります。

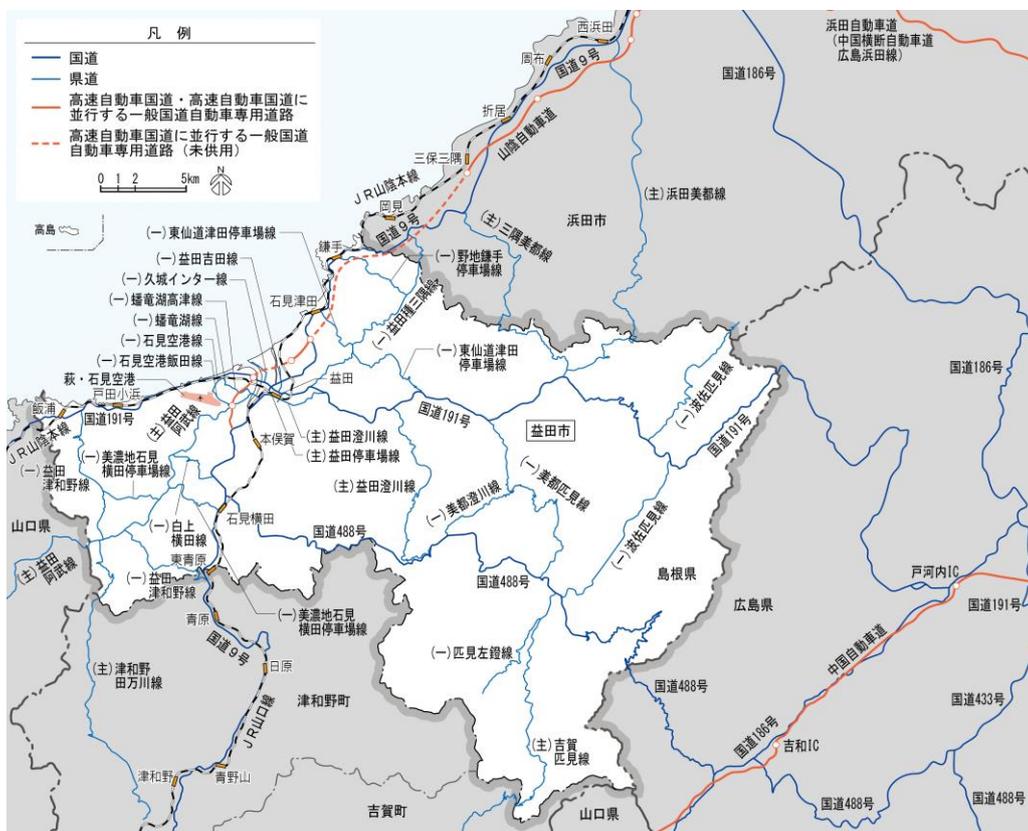


図 2-3 益田市の交通条件

また、益田市は市街地近くに萩・石見空港を有し、1日2往復の東京(羽田)線(所要時間約1時間30分)が運航しており、夏期には期間限定で伊丹空港との間を大阪(伊丹)線(同約1時間)が1日1往復運航しています(平成30(2018)年7月現在)。

### ウ. 本計画における地区・地域区分

後述する、現在に至るまでの市域の変遷や、歴史的経緯を踏まえ、本計画では、明治22(1889)年時点の町村単位を地区区分とします。(ただし、豊田・高城地区は、併せて西益田地区とします。)

また、益田市域を大きく5つの地域に分け、益田・吉田・高津の3地区を益田中部地域、鎌手・安田・種・北仙道・豊川・真砂の5地区を益田東部地域、西益田・二条・小野・美濃・中西の5地区を益田西部地域、東仙道・都茂・二川の3地区を美都地域、匹見上・匹見下・道川の3地区を匹見地域として地域区分します。

そのほか、本計画の記載事項において、現在の益田市域に相当する地域を指す場合には、その時代又は年代を問わず、単に「益田」と表記します。

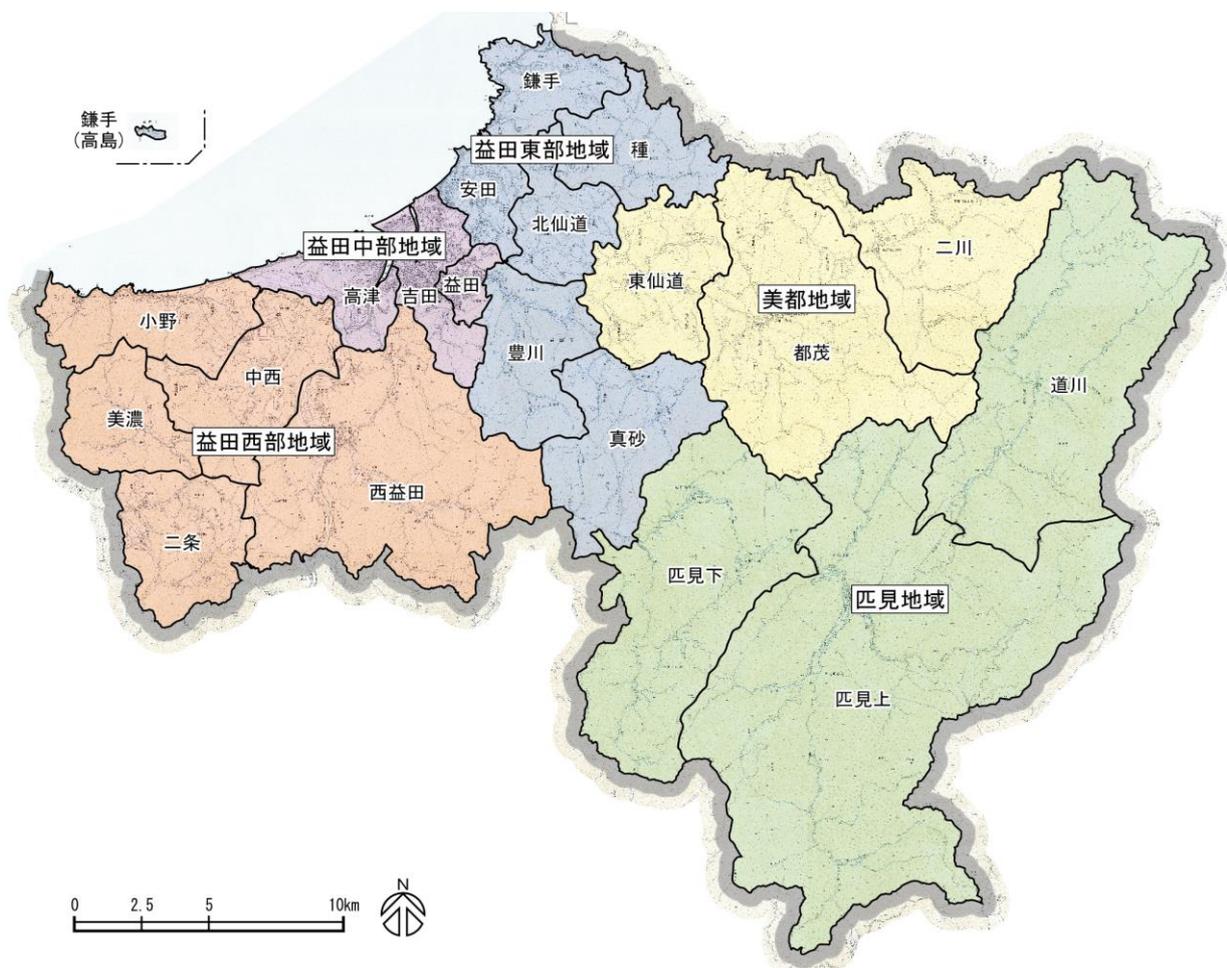


図 2-4 益田市文化財保存活用地域計画における地区・地域区分

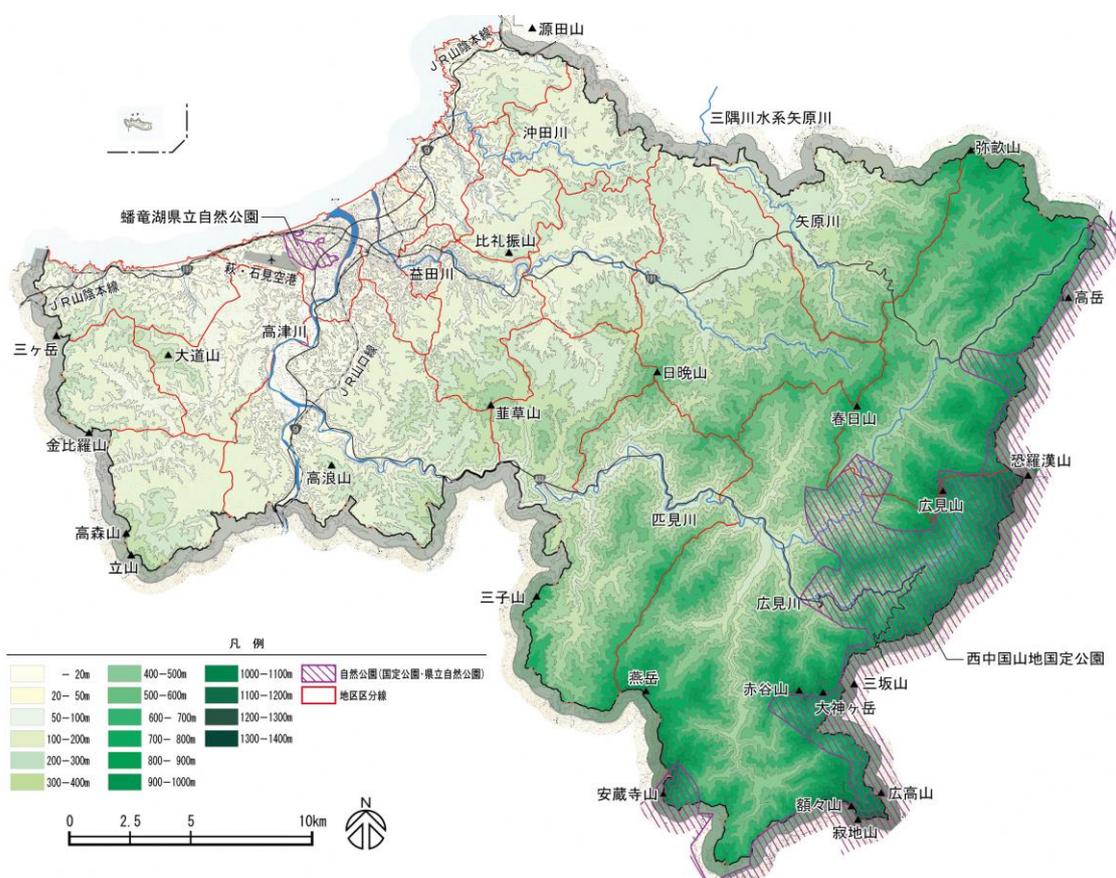
## (2) 地勢及び地質

### ア. 地勢

益田市は、市域の北側は日本海に面し、海岸は三里ヶ浜と呼ばれる長い砂浜と磯海岸による変化に富んだ美しい海岸線が形成されています。一方、南側は中国山地の西部にあたり、恐羅漢山、安蔵寺山など1,000m級の山々が連なっています。

また、中国山地に源を発する一級河川高津川やその支流匹見川、二級河川益田川及び沖田川などが主要河川となって日本海に注ぎ、下流域には高津川や益田川が形づくった益田平野が三角州状に広がっています。なお、市全体では総面積の約86%が林野であり、特に美都地域、匹見地域では96%を山林が占め、急峻な山々を擁す山地部が広がっています。

中国山地の稜線一帯は西中国山地国定公園に含まれ、臨海部の蟠竜湖及びその周辺は県立自然公園に指定されています。



#### <主な山岳>

恐羅漢山 (1346.4m)	がくがくやま 額々山 (1279.0m)	安蔵寺山 (1263.2m)	ひろみやま 広見山 (1186.7m)	あかたにやま 赤谷山 (1181.0m)
だいじんがだけ 大神ヶ岳 (1177.0m)	つばくろだけ 燕岳 (1078.7m)	たかだけ 高岳 (1054.3m)	かすがやま 春日山 (989.2m)	ひぐらしやま 日晩山 (743.4m)
おおどうやま 大道山 (419.6m)	ひれふりやま 比礼振山 (358.8m)	にらくみやま 葦草山 (544m)	たかなみやま 高浪山 (311m)	

#### <主な河川>

- 一級河川：高津川、高津川水系匹見川など  
 二級河川：益田川、沖田川、みすみがわ 三隅川水系矢原川

図 2-5 益田市の地勢(地形など)

## イ. 地質

益田市の地質は、中国山地から日本海の海岸に近い丘陵地帯にかけての広い範囲に、中～古生代の岩石が分布し、続く丘陵地帯から海岸の範囲にかけては、主に新生代の岩石などが分布しています。

中～古生代の岩石は、中国山地の主軸に近い南東エリアでは、中生代の火山岩類が主体であり、<sup>しんせいがんるい</sup>深成岩類、<sup>かんにゅうがんたい</sup>貫入岩体を伴います。これらの岩石は全般に硬質で、東北-南西方向に並行する大断層に伴う変異によって、急峻な地形を構成しています。また、中～古生代の火山岩類分布域は、高津川水系の源流域にあたり、<sup>けいちょうしつ</sup>珪長質(二酸化ケイ素に富む岩石)の硬質な岩石が、清らかな水と溪谷美を作り出しています。

中生代の火山岩類分布域の北西には、中～古生代の付加帯コンプレックスと呼ばれる岩石が分布します。これは、海洋底で形成された岩石が、プレート運動によって大陸縁辺に押し付けられ、各種岩石が混在する地層を形成したものです。岩石が地下の高温高圧の条件で変成作用を受けた<sup>へんせいがんるい</sup>変成岩類を伴うもので、これらは、日本列島の基盤を成す地層の一部とされます。

市内では、付加帯コンプレックスの岩石を貫入した<sup>かこうがんるい</sup>花崗岩類(深成岩)が、<sup>まさご</sup>真砂地区を中心にやや広く分布しており、その岩体の中心付近には、巨大な石英(水晶)と長石の結晶を産出する<sup>うまだにしるやま</sup>ペグマタイト岩脈があり、現在、馬谷城山<sup>うまだにしるやま</sup>鉦山として採掘されています。ここで産出される石英は、単体の結晶としては国内最大級であり、直径1mを超えるものもあります。

美都地区では、石灰岩を伴う<sup>たいせきがんるい</sup>堆積岩類に貫入した<sup>せんりよくがんしつ</sup>閃緑岩質マグマによって鉦化作用が生じ、かつて銅などを産出した都茂<sup>うまだにしるやま</sup>鉦山の鉦床が形成されています。

一方、海岸に近い地域には、新生代の堆積岩類や火山岩類を中心に、中生代の火山岩類、深成岩類などが分布しています。このうち、益田平野は、1万数千年前以降の堆積物で構成される沖積平野で、海岸沿いには砂丘が発達しています。この益田平野の地形発達については、港を拠点とした生業や経済活動の展開と深い関わりがあり、「石西の商都 益田」の成立に関連する要素です。また、平野を取り巻く丘陵には、300万～200万年前の堆積岩類が分布しており、この地層は、石見焼の原料となる陶土を産出し、当地方で利用されてきました。

さらに、市の東部に位置する<sup>かまて</sup>鎌手地区には、新生代古第三紀の火山岩類や深成岩類が分布し、<sup>からおと</sup>唐音の<sup>じやがん</sup>蛇岩(国天・<sup>にしひらばらちやう</sup>西平原町)をはじめ、岩脈やマグマ混交岩など特長的な地質現象を見ることができます。一方で、西部に位置する<sup>おの</sup>小野地区には中生代の火山岩類が分布し、<sup>たたらざき</sup>鑪崎及び<sup>まつしま</sup>松島の<sup>じしゃくいし</sup>磁石石(県天・<sup>いいのうらちやう</sup>飯浦町)など、磁性を帯びた岩体などで構成される特有の景観を見ることができます。



### (3) 植生

#### ア. 植生

益田市の植生は、中国山地の稜線付近において「ブナクラス域自然植生」及び「ヤブツバキクラス域自然植生」がみられ、加えて「ヤブツバキクラス代償植生」と「植林地・耕作地植生」が入り交じった状況にあります。

それ以外の地域では、「ヤブツバキクラス代償植生」と「植林地・耕作地植生」が混在し、高津川沿い及び下流域で「その他」が比較的まとまって形づくられています。

この他、わずかではありますが、高津川・益田川河口付近で、「河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生」がみられます。

#### イ. 植生自然度

植生自然度とは、植生からみて、土地の自然性がどの程度残されているかを示す一つの指標です。環境庁の「緑の国勢調査」では、下記の表のように 10 ランクに区分し、細かく格子状に区切った地区ごとの自然度を判定しています。

表 2-1 植生自然度の区分

植生自然度	区分基準
1	市街地・造成地等：市街地、造成地等の植生のほとんど存在しない地区
2	農耕地(水田・畑)・緑の多い住宅地：畑地、水田等の耕作地、緑の多い住宅地
3	農耕地(樹園地)：果樹園、桑畑、茶畑、苗圃等の樹園地
4	二次草原(背の低い草原)：シバ群落等の背丈の低い草原
5	二次草原(背の高い草原)：ササ群落、ススキ群落等の背丈の高い草原
6	植林地：常緑針葉樹、落葉針葉樹、常緑広葉樹等の植林地
7	二次林：クリーミズナラ群集、クヌギコナラ群落等、一般に二次林と呼ばれている代償植生地区
8	二次林(自然に近いもの)：ブナミズナラ再生林、シイ・カシ萌芽林等、代償植生であっても特に自然植生に近い地区
9	自然林：エゾマツトドマツ群集、ブナ群集等、自然植生のうち多層の植物社会を形成する地区
10	自然草原：高山ハイデ、風衝草原、自然草原等、自然植生のうち単層の植物社会を形成する地区

#### 植生についての説明

○**植生区分とクラス域** 日本の植生は、自然植生の構成種の名をとって、高山帯域(高山草原とハイマツ帯)、コケモモトウヒクラス域(亜高山針葉樹林域)、ブナクラス域(落葉広葉樹林域)、ヤブツバキクラス域(常緑広葉樹林域)の各クラス域に大別されている。この「クラス域」とは、広域に分布し景観を特徴づけている自然植生によって植物社会学的に定義されたもので、主要なクラスの生育域のことを指している。

**ブナクラス域**…日本の落葉広葉樹林域は、群落体系上の最上級単位であるブナクラスの名をとり、ブナクラス域と呼ばれている。ブナクラス域は東北部から北海道では低地からみられる。南にいくほど高度は上がり、中部日本で標高 1500～1600m から 600～700m の間に発達し、九州の霧島で 700m から 1000m となる。

**ヤブツバキクラス域**…日本の常緑広葉樹林域は、体系上の最上級単位であるヤブツバキクラスの名をとって、ヤブツバキクラス域と呼ばれている。ヤブツバキクラス域は関東以西の標高 700～800m 以下で発達し、北にいくほど高度を下げ、東北地方北部では海岸寄りに北上している。逆に南にいくほど高度は上がり、九州の霧島では 1000m が上限となる。ヤブツバキクラス域は、本州、四国、九州までの地域と、常緑植物の豊富な奄美大島以南の琉球及び小笠原の亜熱帯域に大きく二分される。

○**自然植生と代償植生** 現存植生の多くは、本来その土地に生育していた自然植生(原生林など)が人間活動の影響によって置き換えられた代償植生(二次林など)であり、現存植生図の作成にあたっては、植生区分はこれらクラス域の植生について自然植生と代償植生とに区分されている。さらに、河辺・湿原・塩沼地・砂丘などの環境条件の厳しい特殊な立地に生育する植生のように、クラス域を越えて分布する植生(主として自然草原)については、地形や地質的要因で持続する自然植生であるため、特殊立地の自然植生として独立して区分させている。

※出典：環境省自然環境局生物多様性センターHP

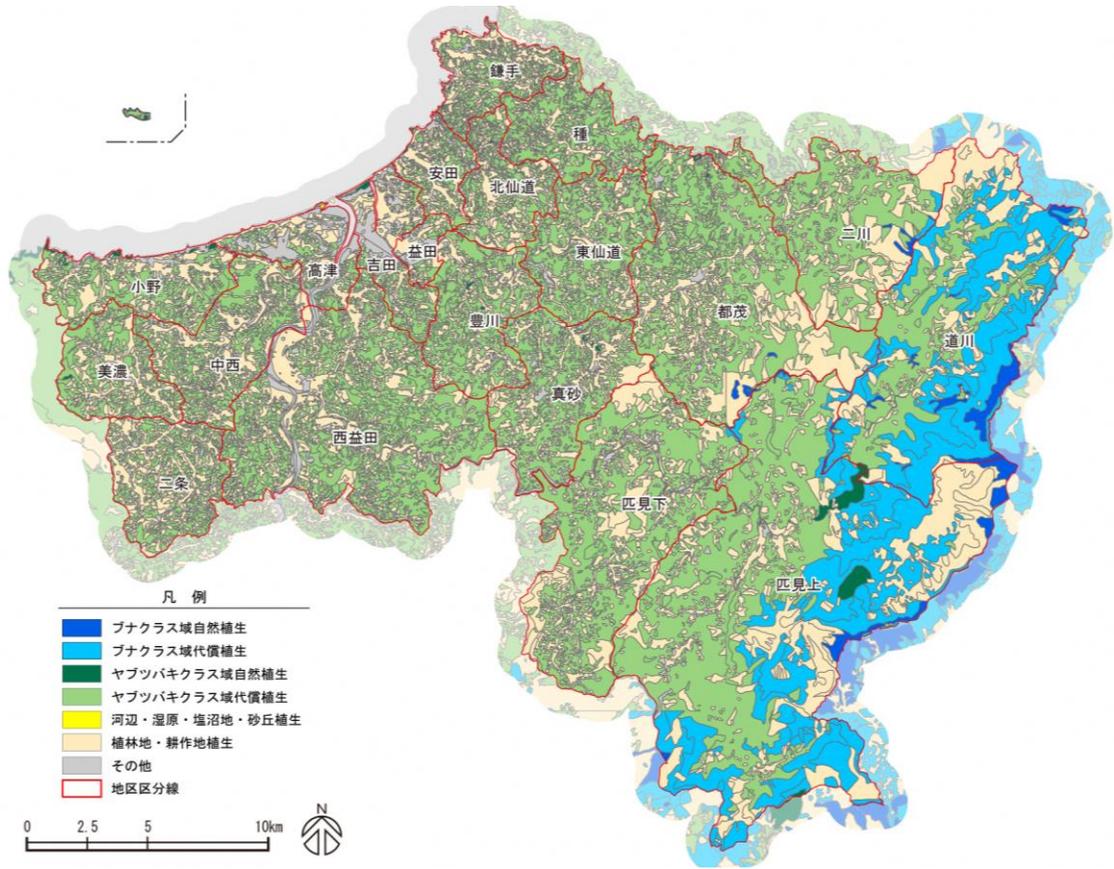


図 2-7 益田市の植生

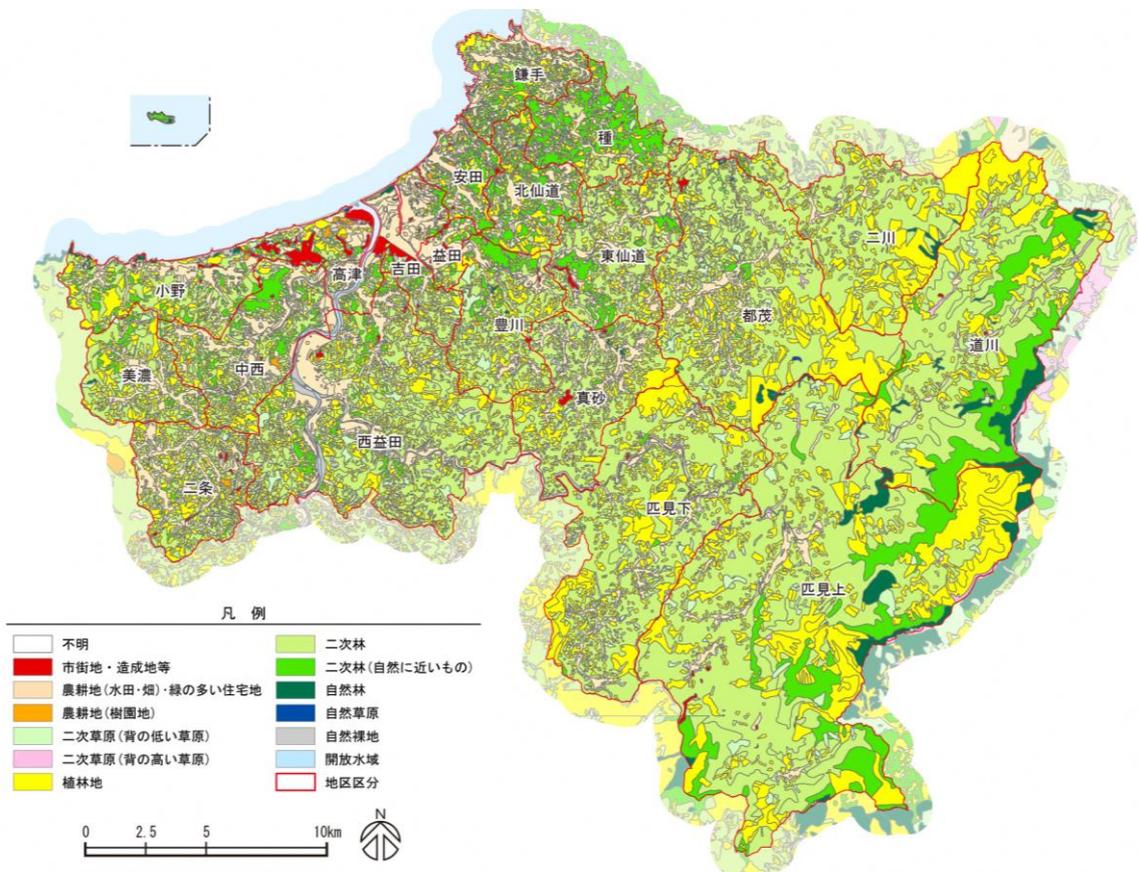


図 2-8 益田市の植生自然度

出典：1/5 万現存植生図・GIS データ  
(環境省自然環境局生物多様性センター)

#### (4) 気象

益田市は日本海側気候に属し、沿岸部は対馬海流が沖合を流れることから比較的温暖ですが、中国山地寄りの地域においては、降雪量が多い山間地特有の気候となっています。特に匹見地域は、豪雪地帯特別措置法に基づく日本最西端の豪雪地帯に指定されています。

気象庁の気象データ(益田)に基づく1981年から2010年までの平均をみると、年間平均気温の平年値は15.6℃、年間降水量の平年値は約1,582mmとなっています。

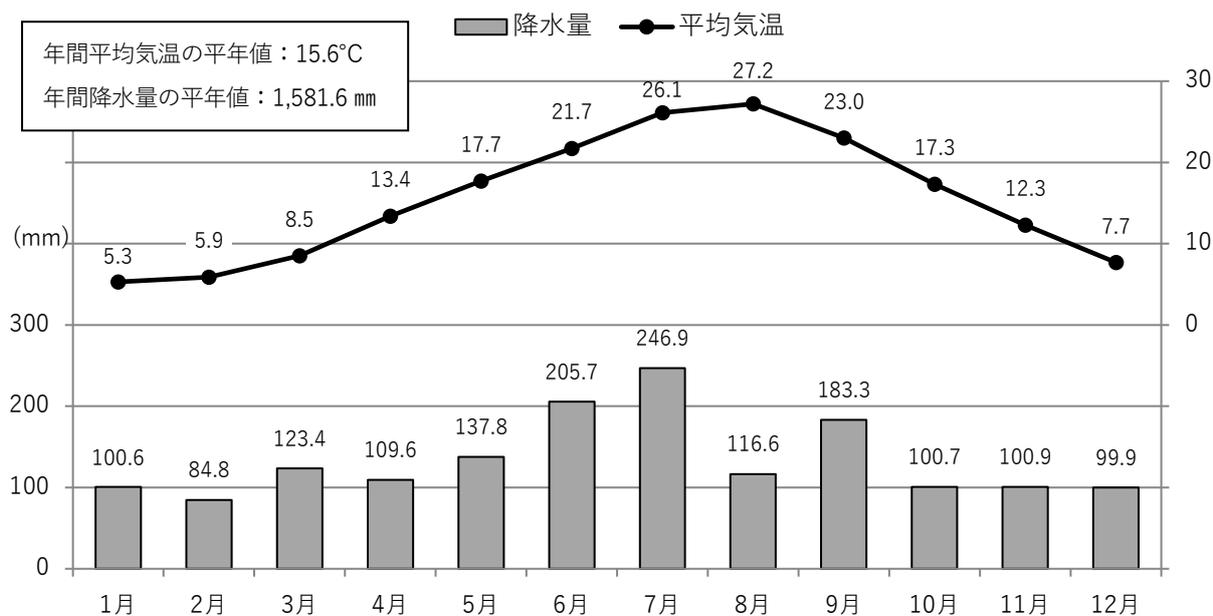


図 2-9 益田市の気象

資料：気象庁・気象データ(益田) 1981～2010年平均

## 2. 社会的環境

### (1) 人口

#### ア. 人口の推移

平成 27(2015)年の人口は、47,718 人(国勢調査)です。その推移をみると、減少傾向が続き、平成 17(2005)年からの 10 年間で 4,650 人、率にして 8.9%の人口減となっています。

平成 2(1990)年からの人口の推移を地域別(旧市町別)にみると、いずれも減少傾向にあります。また、益田市は、平成 16(2004)年 11 月 1 日に 1 市 2 町が合併していますが、それまでの旧益田市、旧美都町、旧匹見町の人口の推移を、国勢調査が始まった大正 9(1920)年からみると、昭和 30(1955)年がピークで、順に 57,883 人、7,558 人、7,550 人となっています。その後、特に旧美都町、旧匹見町では、急激に人口が減少しています。

将来推計人口をみても、人口減少の傾向は続き、2035 年で旧益田市域が 34,163 人、旧美都町が 1,381 人、旧匹見町が 694 人と推計されています。

さらに、地域・地区別でみると、平成 30(2018)年 12 月末現在(住民基本台帳)、益田市の人口の大部分は益田中部地域が占め、その中でも吉田地区、高津地区の人口が相対的に多くなっています。

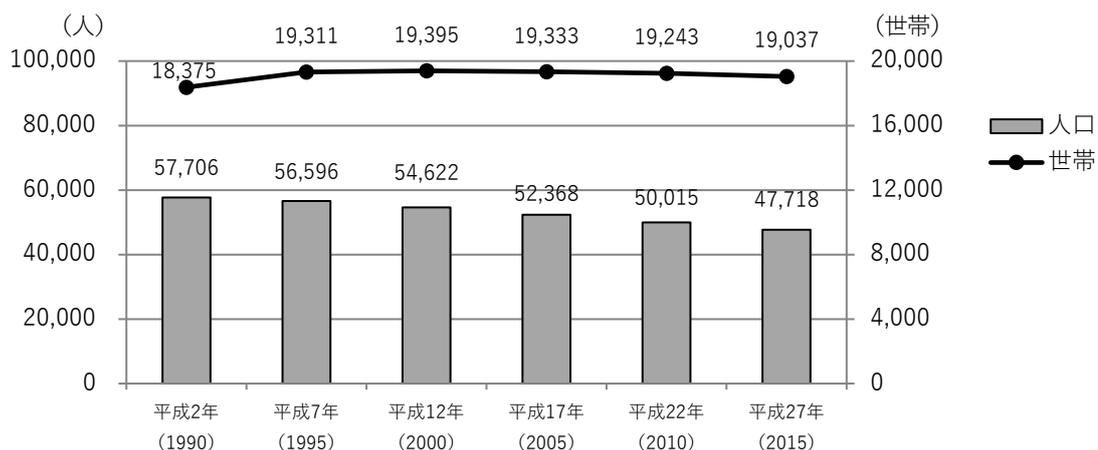


図 2-10 益田市の人口の推移(国勢調査)

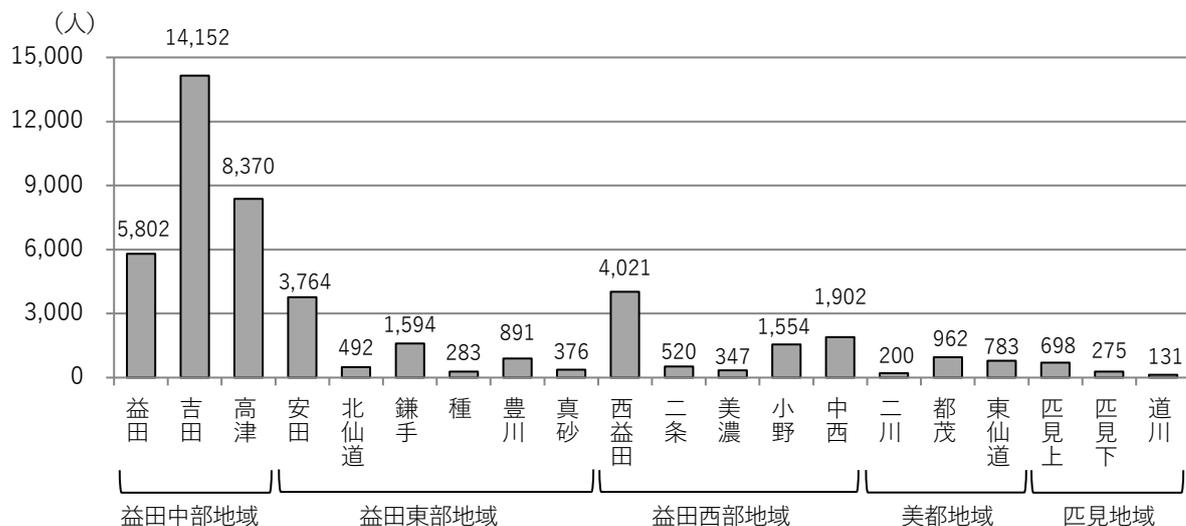


図 2-11 地域別益田市の人口 (住民基本台帳[平成 30 年 6 月末時点])

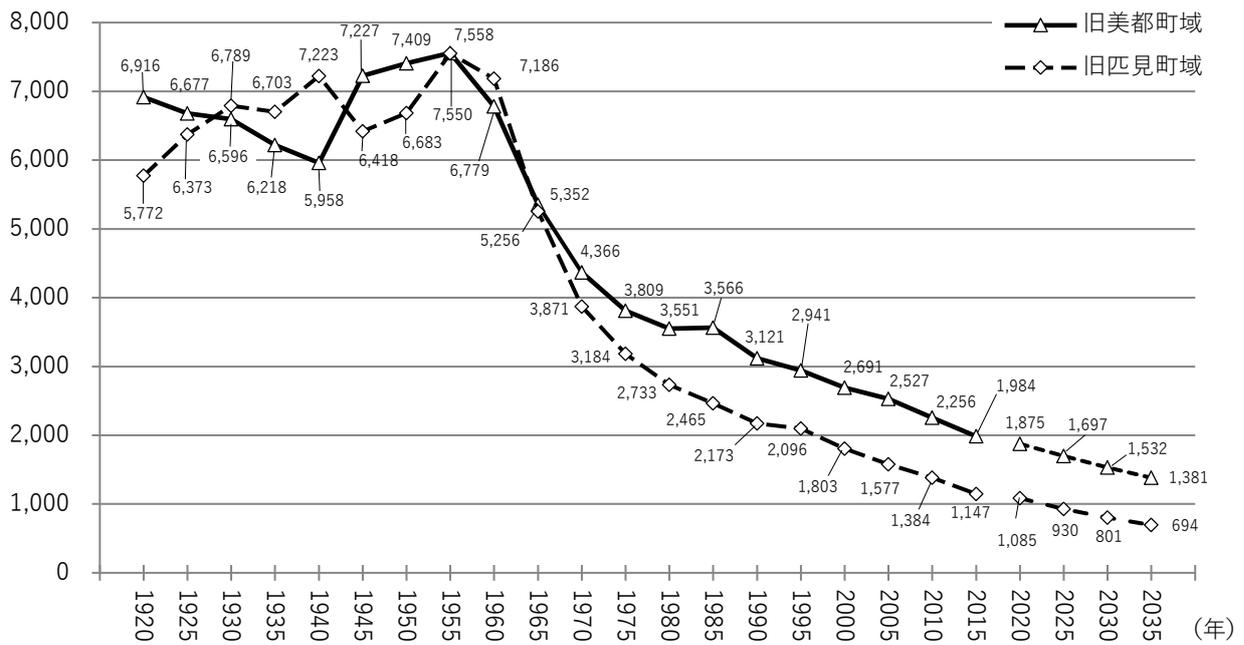
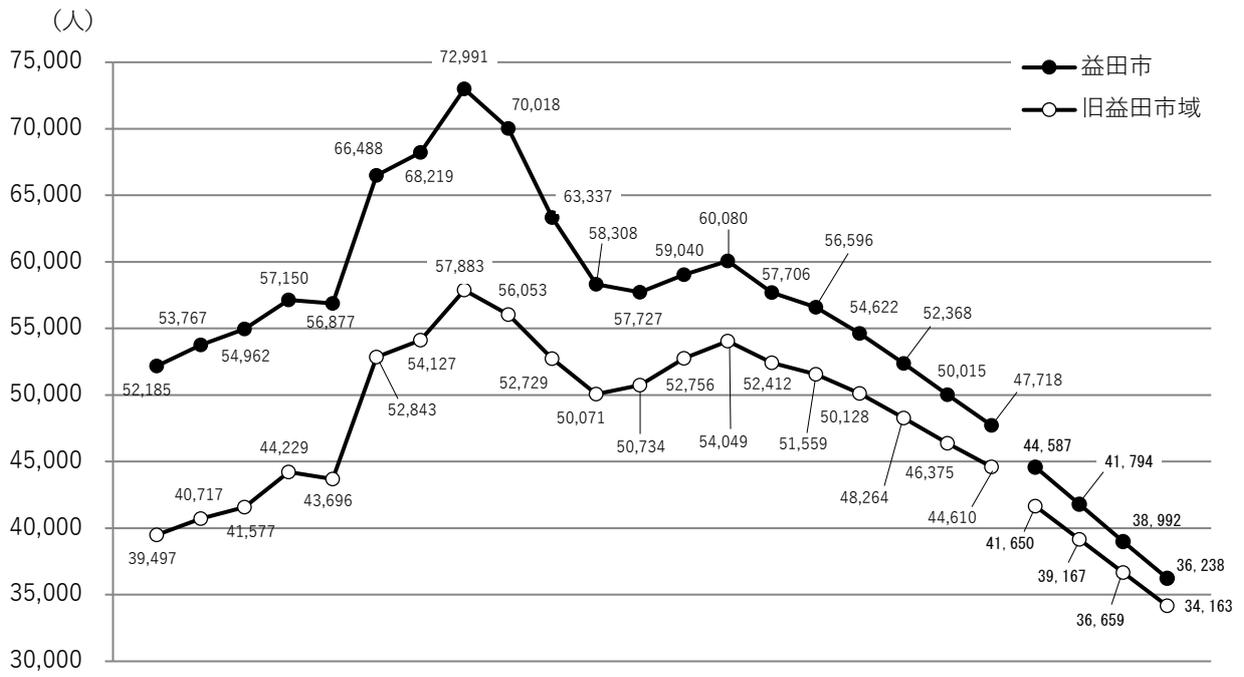


図 2-12 地域別人口の推移(国勢調査：大正 9(1920)年～平成 27(2015)年)と将来推計人口

(まち・ひと・しごと創生 益田市人口ビジョン：2020 年～2035 年)

## イ. 年齢別人口構成

益田市の年齢別人口構成(年齢3区分)をみると、平成7(1995)年に65歳以上の割合が15歳未満の割合を逆転して以後、少子高齢化の傾向が続き、平成27(2015)年には高齢化率が34.9%、つまり、3人に1人以上が65歳以上となっています。

また、地域別でみると、匹見地域の高齢化率(65歳以上人口の割合)は、57.8%に達し、美都地域も45.0%と高くなっています。

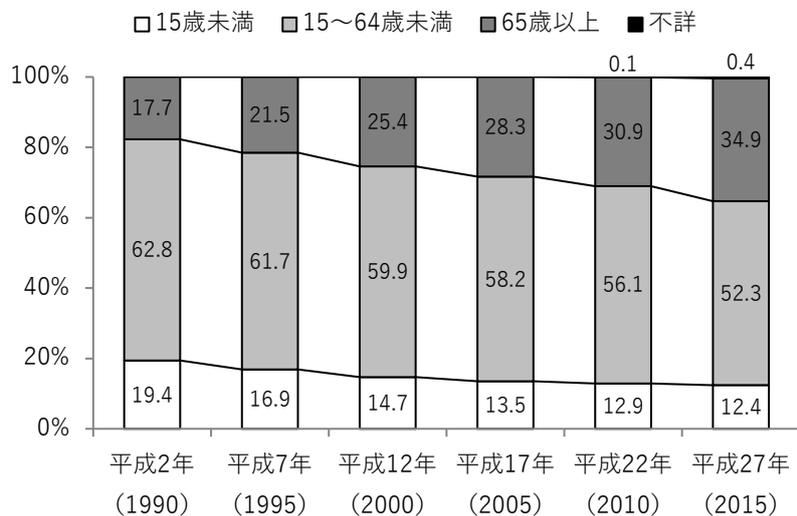


図 2-13 益田市の人口の年齢構成の推移(年齢3区分：国勢調査)

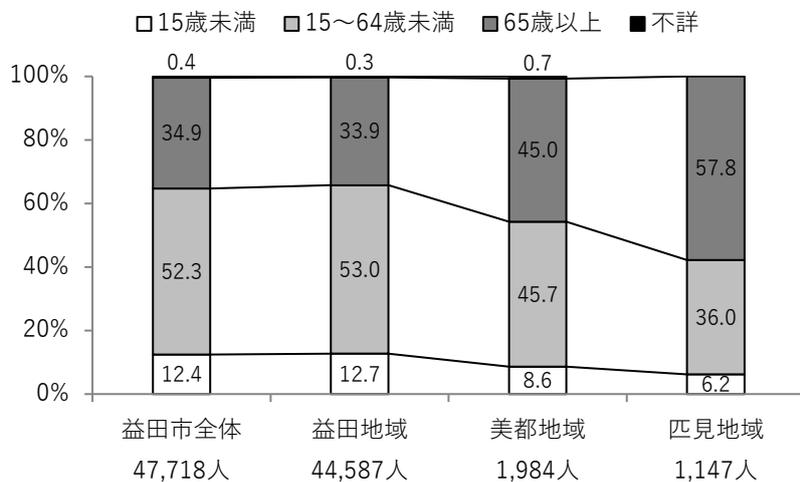


図 2-14 地域別益田市の人口の年齢構成(年齢3区分：平成27年国勢調査)

## (2) 入込観光客数の推移

益田市の入込観光客数は、平成 29(2017)年では 96.1 万人となっています。近年では、島根県芸術文化センター「グラントワ」の開館(平成 17(2005)年 10 月)直後の平成 18(2006)年の約 117 万人がピークとなっており、近年は約 95 万人前後で推移しています。

主な観光施設としては、島根県芸術文化センター「グラントワ」、万葉公園、美都温泉、ひだまりパークみと、<sup>まんよう</sup>匹見峡温泉やすらぎの湯などがあります。



写真 2-1 島根県芸術文化センター「グラントワ」

また、島根県における平成 29 年の市町村別入込観光客数をみると、出雲市、松江市の 2 市が県全体の 2/3 以上(68.0%)を占め、益田市は上位から 8 番目ですが、県全体の 3.0%に留まっています。

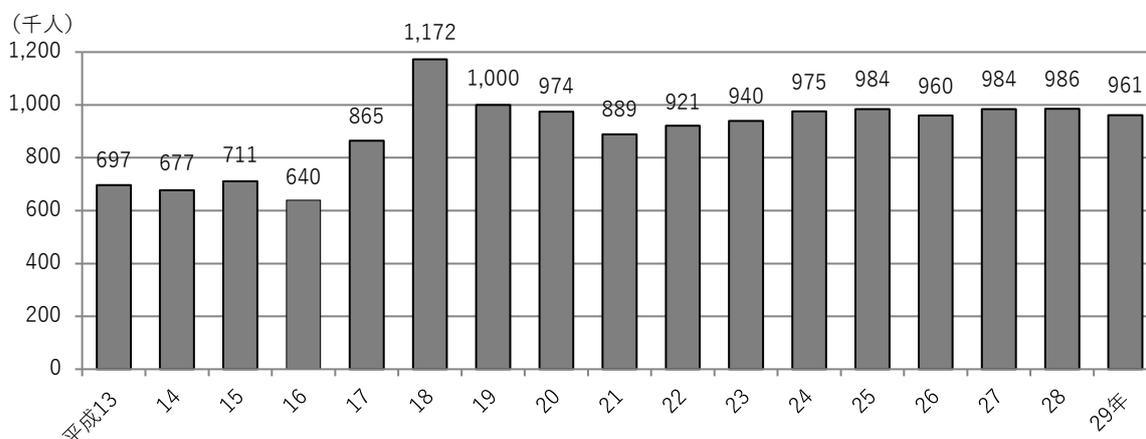


図 2-15 益田市の入込観光客数の推移(観光入込客延べ数)

資料：島根県観光動態調査結果

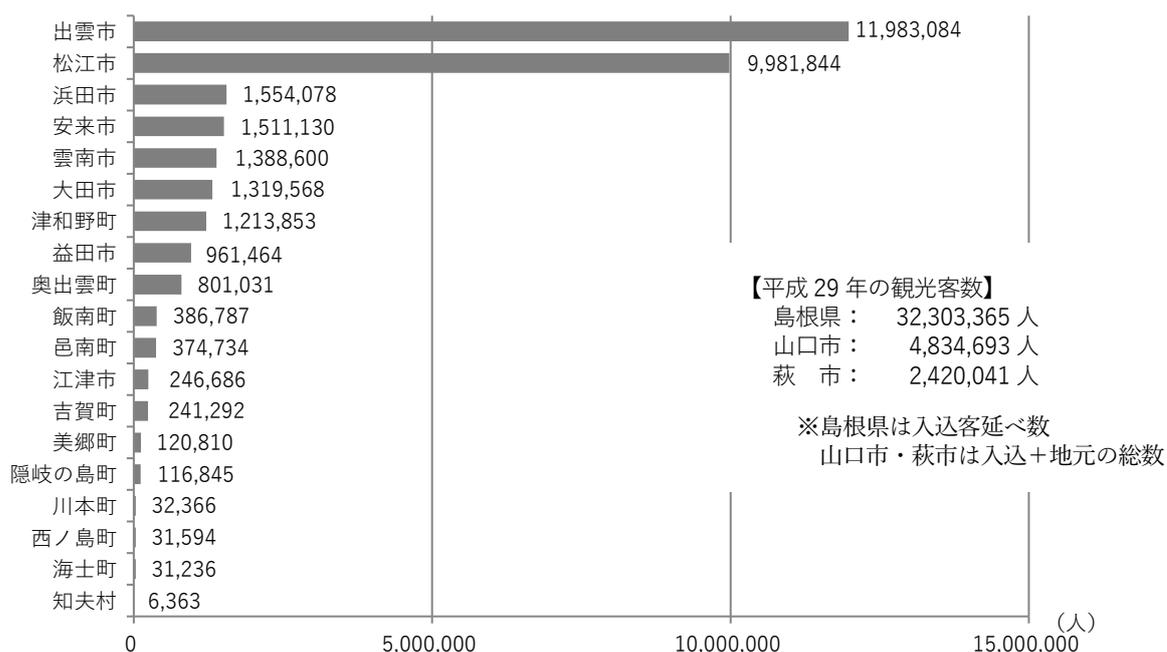


図 2-16 市町村別入込観光客数(観光入込客延べ数)の状況(平成 29 年)

資料：平成 29 年島根県観光動態調査結果、平成 29 年山口県の宿泊者及び観光客の動向

### (3) 博物館・資料館及びその他文化施設等

益田市における博物館・資料館及びその他文化施設等は、県立 1 施設、市立 10 施設、民間 1 施設となっています。

このうち、博物館・資料館等としては、益田市立歴史民俗資料館、益田市立雪舟の郷記念館、益田市立秦記念館、益田市立旧割元庄屋美濃地屋敷、匹見ウッドパーク、大久保広兼石州和紙資料館があります。

このほか、20 地区に地区振興センターが、21 地区に公民館があり、コミュニティ活動・文化活動の拠点となっています。

表 2-2 益田市の博物館・資料館等

名 称	所在地	備 考
島根県芸術文化センター「グラントワ」	益田市有明町 5-15	島根県立石見美術館と島根県立いわみ芸劇場が複合した石見地域の芸術文化の拠点
益田市立市民学習センター	益田市元町 11-26	生涯学習の振興を図り、市民の交流と地域活動を推進するための拠点
ふれあいホールみと	益田市美都町都茂 1692 番地甲	多目的ホールを備えた地域活動の拠点施設で、公民館や図書館分館を併設
匹見タウンホール	益田市匹見町匹見イ 1260	過疎のとりでとして建設された豪雪山山村開発総合センターの愛称
益田市人権センター	益田市須子町 3-1	人権尊重の推進とその擁護のための事業及び隣保事業を行う拠点
益田市立図書館	益田市常盤町 8-6	図書、記録等の蔵書数は約 178,000 点で、分館として美都図書館を置く
匹見上公民館図書室	益田市匹見町匹見イ 674	一般図書、匹見町の歴史資料等を収蔵
益田市立歴史民俗資料館	益田市本町 6-8	歴史、民俗、考古等に関する資料の収集保存、展示活用、調査研究を行う施設
益田市立雪舟の郷記念館	益田市乙吉町イ 1149	雪舟、益田家等に関する歴史資料の収集保存、展示活用、調査研究を行う施設
匹見ウッドパーク	益田市匹見町匹見イ 674	林業振興センターの通称で、町内の林業や自然、歴史に関する資料、パズル等を展示
益田市立秦記念館	益田市美都町都茂 807	化学療法の先駆者秦佐八郎博士の業績を顕彰し、関連資料の収集保存、展示を行う施設
益田市立旧割元庄屋美濃地屋敷	益田市匹見町道川イ 50	地域間の交流事業の拠点として整備された江戸時代の歴史的建造物
大久保広兼石州和紙資料館	益田市美都町都茂 3045	浜田藩の御用紙漉を勤めた広兼家 13 代 200 年に及ぶ資料を展示



写真 2-2 益田市立雪舟の郷記念館



写真 2-3 益田市立歴史民俗資料館

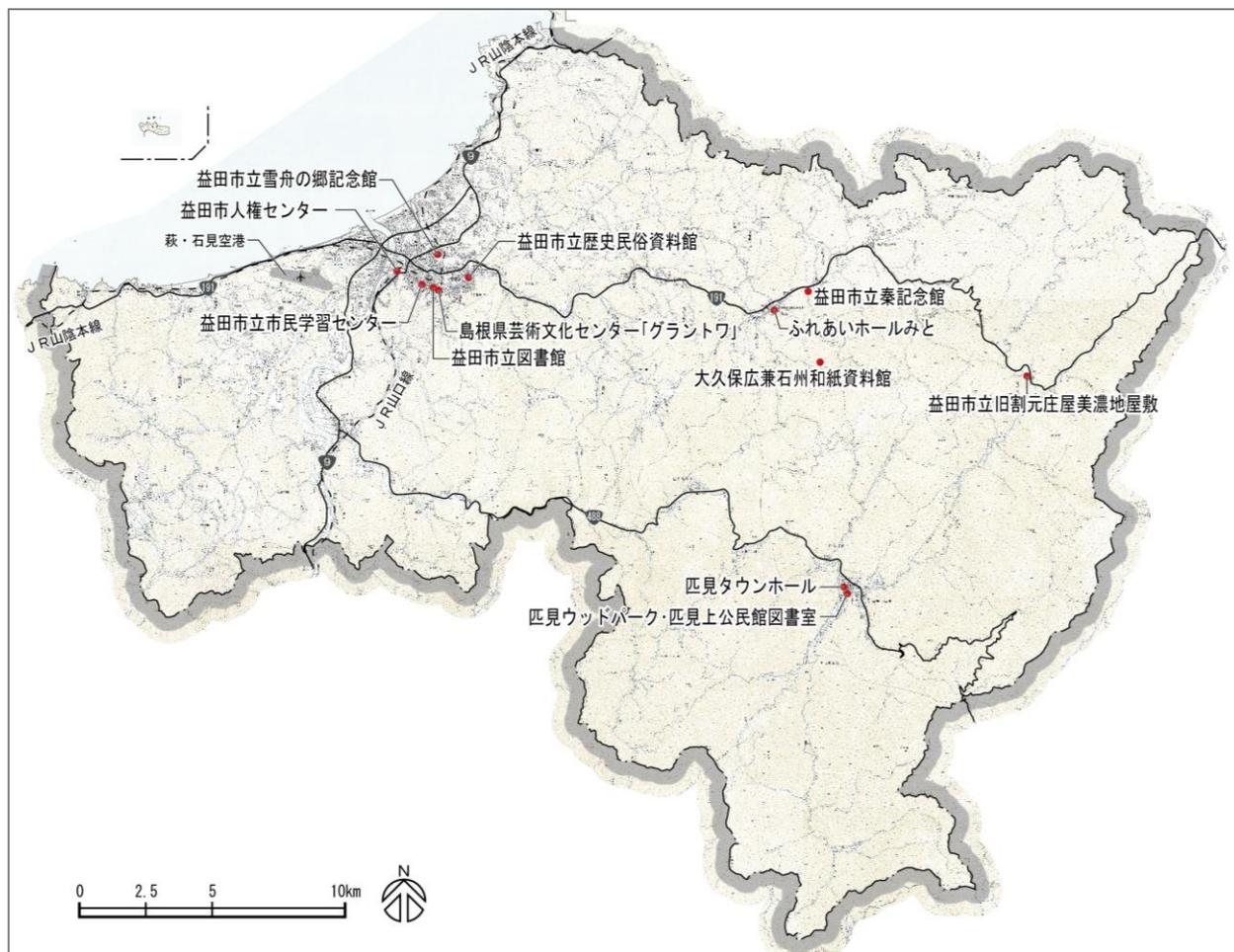


図 2-17 益田市の博物館・資料館等



写真 2-4 益田市立秦記念館



写真 2-5 益田市立旧割元庄屋美濃地屋敷

#### (4) 歴史・文化・芸能団体等

益田市では、神楽社中をはじめ、多数の芸能団体や文化団体が精力的に活動をしています。

また、地域の歴史文化の調査研究、保存・活用、普及啓発等に取り組む団体が様々な活動を推進しています。

#### ア. 石見神楽社中

表 2-3 市内の神楽団体

資料：一般社団法人益田市観光協会 HP

団体名	備考
<b>【神和会】</b>	
道川神楽社中	市指定無形民俗文化財、指定名称「道川神楽」
石見神楽須子社中	
石見神楽横田社中	
丸茂神楽社中	市指定無形民俗文化財、指定名称「丸茂神楽」
三谷神楽社中	市指定無形民俗文化財、指定名称「三谷神楽」
石見神楽上吉田保存会	
石見神楽久々茂保存会	
石見神楽保存会久城社中	市指定無形民俗文化財、指定名称「久城神楽舞」 所有する木彫面は市指定有形民俗文化財
高津神楽社中	
種神楽保存会	市指定無形民俗文化財、指定名称「種神楽舞二題」
津田神楽社中	
真砂神楽保存会	
<b>【同好会】</b>	
多田神楽保存会	
原浜さつき会	
梅月神遊座	
大草神楽愛好会	
<b>【無所属】</b>	
石見神楽久木社中	
匹見神楽社中	市指定無形民俗文化財、指定名称「匹見神楽」
三葛神楽保持者会	県指定無形民俗文化財、指定名称「三葛神楽」 所有する木彫面は市指定工芸品
飯田神楽同好会	

※ 中には、子ども神楽を擁する社中や学校のクラブ活動として神楽に取り組む地域もあります。

## イ. 益田市文化協会

益田市を拠点に文化活動を行う団体で構成される協会組織。

表 2-4 加入団体一覧

部門	団体名	部門	団体名	
絵画	益田市美術展実行委員会	音楽	尺八哲友会	
	益田美術クラブ		正派雅映会	
	彩友会		當道益田福寿会	
工芸	フローリスト マリコスクール		益田雅会せせらぎ	
	細川流盆石		琴名流大正琴・琴海会	
写真	益田市フォトコンテスト実行委員会		本條流広駒社中	
書道	島根県独立書人団益田支部		島根邦楽集団	
	五風会益田支部		芸能	喜多流喜扇会
	習字研究社島根県連合会			謡曲観世流
書道	益田書道会		芸能	島根吟詠連盟益田地区吟友会
文芸	石西歌人クラブ	日本舞踊藤益会		
	益田俳句協会	清吟堂吟友会益田ブロック		
	益田川柳会	向横田郷土芸能保存会		
華道	いけばな池坊石州支部・石見支部	益田糸操り人形保持者会		
	小原流石見支部益田会	千波流美里会		
	未生流	茜屋出雲流松喬会		
茶道	(財)煎茶道三癸亭賣茶流益田支部	哲泉流日本吟詠協会島根益田支部		
	表千家同好会益田地区会	産土の会		
	益田市文化協会茶道部裏千家	園芸		益田盆栽会
	煎茶道松月流島根西支部		益田山草会	
	上田宗箇流益田支部			

※このほかにも、志賀団七踊りの保存会、道川囃子田の保存会である道川ゆうゆう会など、文化財指定を受けているものの文化協会に所属していない芸能団体や、田囃子保存会等地域の伝統芸能を保存・継承する会等、文化活動に取り組む団体が多数ある。

## ウ. 益田市の歴史文化の未来を考えるネットワーク会議

歴史文化をテーマに活動する益田市内の団体が集まり、情報共有と活動連携を通して、歴史を活かしたまちづくりの推進を図ることを目的とする集合体。

表 2-5 構成団体一覧

団体名	活動内容
一滴水	自然・歴史文化を活かした益田地区の活性化等
NPO 法人 久栄会	歴史文化の研究と地域の活性化につながるまちづくりの推進
NPO-MASUDA	秦佐八郎博士の顕彰等地域の歴史文化の活用と発信
郷土石見研究懇話会益田支部	郷土の歴史・地理・生物・民俗などの研究等
山陰道鎌手保存会	旧山陰道の保存・整備・活用と地区の歴史文化の掘り起し
石西の文化を学ぶれんげ草の会	美術や歴史の見聞を広め、学識・教養を高める
益田市雪舟顕彰会	雪舟の顕彰
日本遺産を目指す益田市民会議	益田市から日本遺産認定を応援する活動
益田観光ガイド友の会	自然及び文化遺産に関する学習と市内の観光ガイド
益田古文書を読む会	地域に残る古文書を通して地域の歴史を学ぶ
益田市柿本人麿公顕彰会	柿本人麿の顕彰
益田「中世の食」再現プロジェクト	中世の食再現と食が輝き、人が輝き、地域が輝くまちづくり
郷土石見研究懇話会美都支部	地域の歴史・地理・生物・民俗などの研究等
都茂地区直進会	都茂鉾山の調査・整備・情報発信等
四ツ山保存会	四ツ山城の保存整備と仙道地区の歴史学習
ひきみ学舎	匹見の地域資源の再発見と次世代の継承
石西の歴史と考古を語る会	小丸山古墳、三宅御土居跡等の保存運動の取り組み
益田市文化協会	「イ. 益田市文化協会」の項参照

### 3. 歴史的環境

#### (1) 益田の黎明 — 旧石器・縄文時代 —

益田市域の歴史は、旧石器時代まで遡ります。山間部の新模原遺跡(県史跡・匹見町道川)では、約2万年以上前と推定される地層から旧石器時代の石器が発見され、この頃から人々の営みがあったことが確認されました。

縄文時代になると遺跡の数が増加します。特に匹見地区では、上ノ原・神田・ヨレ・イセ遺跡(いずれも市史跡・匹見)、水田ノ上・石ヶ坪遺跡(いずれも市史跡・紙祖)、田中ノ尻・上家屋遺跡(いずれも市史跡・道川)、山崎・田屋ノ原遺跡(澄川)、沖ノ原・芝遺跡(広瀬)、広戸遺跡(石谷)など、場所や性格、時期などバラエティに富む遺跡が多く発見されており、「西日本の縄文銀座」と称されることもあるなど、縄文時代の人々の生活の様子を知る上で、とても貴重な事例となっています。これは、標高の高い匹見地区には落葉広葉樹林帯が広がっているため、ドングリ類などの食料となる木の実や根菜類が豊富にあり、また、それらを求めて小動物が集まるなど、狩猟採集を主としていた縄文時代の人々にとって、自然の恩恵を大きく受けることのできた場所であったからと考えられています。

縄文時代の後期の遺跡の中には、特徴的な配石遺構を持つものがあることから、葬送儀礼を含めた宗教的な儀式が行われていたと考えられます。また、出土品には広島県冠山産安山岩のほか、大分県姫島産黒曜石で作られた石器(ヨレ遺跡、イセ遺跡など)、新潟県糸魚川産翡翠で作られた冪玉(水田ノ上 A 遺跡)、九州系の並木式土器や阿高式土器(石ヶ坪遺跡)など、広範な地域との交流をうかがわせるものがあります。これは、中国山地を縦断する断層谷や南北方向に流れる河川の谷が主要な交通路となり、広域的な文化交流の要衝地として拠点的な集落が複数形成されていった結果と考えられます。

この時代、沿岸部でも、潟湖周辺の微高地や低丘陵に狩猟・漁労を営む採集民集落が出現します。久城西Ⅱ遺跡(久城町)や堂ノ上遺跡(久城町)では縄文時代草創期が下限と推定される石器が発見されています。さらに、久城丘陵上の若葉台遺跡(久城町)からは、狩猟用の落とし穴とともに後期前葉の縄文土器が出土し、沖手遺跡(久城町)では後期末から晩期初頭の丸木舟が発見されています。三宅御土居跡(国史跡・三宅町)の地に最初の人跡が見られるのは、晩期のことです。

一方、益田川上流域の美都地区では、酒屋原遺跡(仙道)や本郷遺跡(宇津川)で後～晩期の縄文土器が確認されています。また、高津川流域では、後～晩期の土器が出土する平野部の安富王子台遺跡(安富町)が古くから良く知られています。



写真 2-6 新模原遺跡



写真 2-7 水田ノ上 A 遺跡

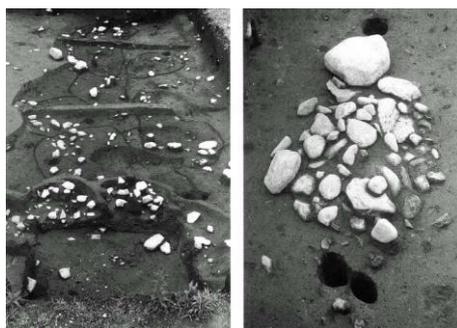


写真 2-8 イセ遺跡

## (2) 稲作・定住と小首長の登場 — 弥生時代 —

弥生時代になると稲作が始まり、環濠集落や高地性集落も営まれ、弥生時代後期にかけて多くの竪穴住居を有する広域で安定的な集落が展開していきました。

高津川沿いの自然堤防の後背湿地に営まれていた浜寄・地方遺跡(高津町)では弥生時代前期の水田が検出されました。弥生から中世までの各時代の遺物が多く出土しており、高津川下流域で長期間存続した拠点集落の遺跡と考えられています。浜寄遺跡を見下ろす丘陵上で発見されたサガリ遺跡は、標高 50m ほどの丘陵上に立地し、防御を目的とした高地性集落との見方があります。

また、高津川・益田川河口域に展開した沖手遺跡においても、弥生時代前期の土器が少量ながら出土しており、初期の農耕集落が存在した可能性があります。中期以降では、久城丘陵西端の専光寺脇遺跡(久城町)で発見された貼石墳丘墓は、益田川河口部一帯の集落をまとめた小首長の台頭を示しています。

一方、高津川中流域の安富地区では、集落域を区画する溝をもつ弥生中期の羽場遺跡(安富町)や、多数の住居跡が重なり合っで見つかった弥生後期の大規模集落である中小路遺跡(安富町)があります。ここでは、西部瀬戸内系の弥生土器が多量に出土しており、前代から引き続き広域にわたる交流が行われていたことを物語っています。

匹見地区では、イセ遺跡及び長通遺跡(紙祖)で竪穴住居が発見されたほか、下手遺跡(匹見)では弥生時代の配石遺構が発見されており、縄文時代からの継承が推測されています。また、河岸段丘上段面に立地する弥生時代後期の江田平台遺跡(匹見)や松田原遺跡(匹見)は、部族・集落間の緊張による防御を目的とした高地性集落と推測されています。また、水田ノ上遺跡では細形銅戈が発見されています。この形式のものは弥生時代前期末に朝鮮半島から北部九州に入った副葬品として扱われる大変稀少なものであり、その搬入経路や用途目的などが注目されています。

この他、益田川流域の仙道地区の酒屋原遺跡、都茂地区の唐干田遺跡においても、前代から弥生時代後期に至るまでの土器が発見されており、主要河川の上流域でも安定した河岸段丘上を基盤として農耕社会が成立した状況を確認することができます。



写真 2-9 浜寄遺跡で見つかった水田跡



写真 2-10 サガリ遺跡



写真 2-11 中小路遺跡



写真 2-12 羽場遺跡



写真 2-13 下手遺跡

### (3) 有力な首長の登場と古墳 — 古墳時代 —

古墳時代になると、益田川以東の益田平野の周辺部で古墳が造られ始めます。

住宅団地造成中に三角縁神獸鏡が発見された四塚山古墳(下本郷町)は、古墳時代前期に位置付けられる市内最古の古墳と推定されています。次いで築かれた大元1号墳(県史跡・遠田町)は、全長約85mの前方後円墳で、石見地方最大の規模を誇ります。古墳時代中期のスクモ塚古墳(国史跡・久城町)は、直径53mの造り出し付き円墳として国の史跡に指定されていますが、隣接する方墳と併せて全長100mに及ぶ前方後円墳であるとの見方もあります。古墳時代後期の小丸山古墳(市史跡・乙吉町)は、全長約52mの前方後円墳で、周溝と周堤を備えた形態は、石見地域唯一のもので、馬鐸や鈴杏葉等金属製の馬具が出土しているのも特徴の一つです。これらの古墳は、日本海を望む丘陵上に立地しています。

古墳時代全期間を通じて益田平野とその周辺部において、こうした首長の系譜を引くと考えられる大型古墳が、継続的に築造されましたが、その背景として古墳時代の益田地域がヤマト政権による日本海沿岸地域支配の西の拠点に位置づけられていたことが考えられます。

一方で、古墳時代後期になると台頭してきた有力者層も鵜の鼻古墳群(県史跡・遠田町)、白上古墳(市史跡・白上町)、片山横穴群(東町)、北長迫横穴群(赤城町)などの墳墓、群集墳、横穴群を造営しました。また、山間地においても、三谷古墳群(市史跡・美都町三谷)、江田古墳・和田古墳(市史跡・匹見町匹見)などが築造されました。

これら後期古墳に副葬された須恵器は、地域東部の本片子窯跡(津田町)などから供給されたと考えられますが、この本片子窯跡からは、当時の官衙<sup>(5)</sup>や古代寺院に供給されたと考えられる丸瓦や平瓦も出土しています。



写真 2-14 スクモ塚古墳上空から日本海を望む



写真 2-15 小丸山古墳出土の金属製馬具  
(益田市パンフレット『古代の益田を歩いてみよう』より)



写真 2-16 鵜の鼻古墳群出土の装飾品

<sup>(5)</sup> 官衙…役所、官庁のこと。

#### (4) 官衙・式内社と柿本人麿 — 古代(奈良・平安時代) —

奈良時代には、現在の島根県の西半に石見国が置かれ、現在の益田市域は、ほぼ石見国美濃郡に相当します。当初、美濃郡には現在の鹿足郡も含まれていましたが、承和10(843)年に分割されました。『和名類聚抄』には、益田・荅気・大農・美濃・小野・山前・山田・都茂の八郷が美濃郡として書き上げられています。石見国府は、現在の浜田市に置かれました。美濃郡衙<sup>(6)</sup>は特定されていませんが、中小路遺跡では直径1mに及ぶ柱穴群が検出されるなど官衙に関わる建物と推測されています。また、益田川中流域の酒屋原遺跡(美都町仙道)でも円面硯<sup>(7)</sup>などが出土していることから、官衙的な性格を有する遺跡と考えられています。また、中世益田氏の居館が置かれた三宅御土居跡を「屯倉」<sup>(8)</sup>と想定する説もあります。

元慶5(881)年に、都茂郷丸山で採銅が始まったことが「日本三代実録」にみえます。延長5(927)年成立の「延喜式」には、この都茂鉦山の技術者たちが信仰したと思われる佐毘売山神社(乙子町)がみえ、他に、菅野天財若子命神社(神社不明)、染羽天石勝命神社(染羽町の染羽天石勝神社)、櫛代賀姫命神社(久城町の櫛代賀姫神社)、小野天大神之多初阿豆委居命神社の4社が記されています<sup>(9)</sup>。小野天大神之多初阿豆委居命神社は小野神社(戸田町)に比定されていましたが、近年、豊田神社(横田町)とする説も唱えられています。この豊田神社の奥の院である石塔寺権現は、「日本三代実録」に元慶2(878)年に従五位下に叙されたとある「石塔鬼王帝釈天王国社神」と考えられています。

また、万葉の歌聖・柿本人麿は、国司として、あるいは流人として石見で晩年を過ごし、益田の地で亡くなったという伝承があり、益田は人麿の死没地として有力視されています。さらに、戸田が人麿の出生地であるという伝承もあります。人麿の伝承と関わるのが万寿3(1026)年の大津波の伝承で、人麿が亡くなった地とされる鴨山(あるいは鴨島)や、益田川河口部に存在したという、「五福寺」といわれる5つの「福」がつく寺院が流失したという説があります。現存する中須町の福王寺と東町の万福寺は、これらの後身の寺院(万福寺は中須の安福寺を移したもの)といわれています。

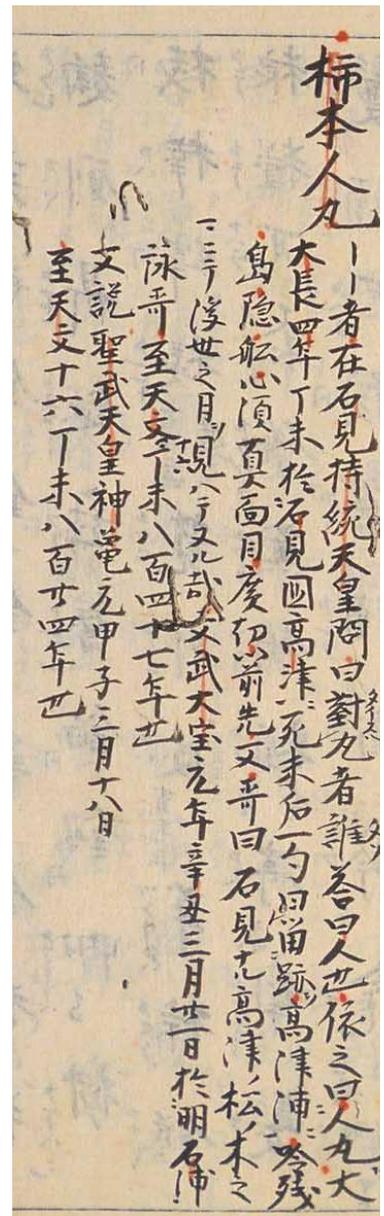


写真 2-17 「運歩色葉集」の丸の項  
(京都大学附属図書館所蔵)

<sup>(6)</sup> 郡衙…律令制下の郡の役所。

<sup>(7)</sup> 円面硯…古代の硯の一形態で、丸い形で脚が付く須恵器。官衙遺跡から出土する例が多い。

<sup>(8)</sup> 屯倉…大和朝廷の直轄領。官家、屯家、屯宅、三宅などとも書く。本来は、朝廷直轄地の事務所・倉庫群の意味。大化の改新によって廃止された。

<sup>(9)</sup> 式内社…『延喜式』の巻9・10「神名帳」に記載されている神社。「神名帳」は、当時「官社」に指定されていた全国の神社一覧。式内社は、「延喜式の内に記された神社」の意味で、延喜式内社、式社ともいう。

## (5) 中世の益田と益田氏 — 平安末期・鎌倉・南北朝・戦国・安土桃山時代 —

平安時代末に益田の平野部では、益田荘と長野荘という大規模な荘園が成立し、両荘園は、天皇家、摂関家、門跡寺院といった有力な荘園領主の支配下にありました。また、山間部の国衙領<sup>(10)</sup>・津毛別符<sup>(11)</sup>・丸毛別符、疋見別符が成立しました。益田荘は摂関九条家の傍流が知行(支配)していたことから、対外交渉への関心があったことが指摘されています。そのことと関連して注目されているのが沖手遺跡で、11世紀後半から12世紀前半に盛期を迎えた港湾集落と考えられています。益田氏の祖とされる藤原(御神本)国兼はこの頃、石見国司として石見国府(浜田市上府町・下府町)に赴任したとされます。

源平合戦で大きな勲功をたてた藤原(御神本)兼高は、石見全域に及ぶ所領と武士団の指導者的地位を得ました。兼高の子や孫の代に、一族は益田、三隅、周布、福屋などの各氏に分かれ、それぞれが独立した領主として活動しました。このうち、益田を本拠としたのが益田氏で、鎌倉時代後期は、益田川中流域の山道(美都町仙道)を本拠としていたと考えられています。

南北朝時代には、益田兼見が益田本郷を掌握し、現在の益田市の平野部の大半を支配下に収めました。益田兼見は万福寺を開き、医光寺の前身崇観寺を諸山<sup>(12)</sup>格に列し、家訓にあたる置文を定めるなど、中世の益田と益田氏の基礎を築きました。室町時代の益田兼堯は、父と兄の死により家督を継ぎ、東の三隅氏、西の吉見氏との緊張関係の中で、室町幕府や守護山名氏と関係を深めることで益田家を保ちました。また、晩年には、雪舟を招いて「益田兼堯像」を描かせたほか、万福寺と崇観寺に庭園を築かせるなど、益田に室町文化を花開かせました。

戦国時代前半の当主である益田宗兼は、上洛して將軍を支え、高い待遇と多くの宝物を与えられました。こうして、益田氏は石見の領主達の盟主的存在となっていきます。戦国時代後半の当主である益田藤兼は、陶晴賢の下剋上に、石見の領主連合の盟主として積極的に協力し、三隅(浜田市三隅町)や長門国阿武郡(山口県北部)に勢力を拡大しましたが、毛利氏が陶氏や大内氏を滅ぼすと、これに服属します。しかし、服属にあたっては、舶来品を含めた莫大な贈り物と豪華な料理によるもてなしで、毛利氏にその経済力と日本海交易の基盤とを印象づけ、これ以降、益田氏は毛利氏に重視されることとなりました。

慶長5(1600)年の関ヶ原の合戦で毛利氏が敗れ、中国地方八ヶ国の領地のほとんどを没収されて周防・長門(山口県)に移されると、益田氏もこれに従って長門国須佐(山口県萩市)に移りました。この時期の当主益田元祥は、中世から近世への時代の移行期に柔軟に対応し、益田家は



写真 2-18 「益田家文書」の益田兼見讓状  
(東京大学史料編纂所蔵)



写真 2-19 雪舟禅師像(市指定)  
(雪舟の郷記念館所蔵)

(10) 国衙領…平安時代以降期以降、私領である荘園に対して国衙(国司)の直接支配下にある土地を指す。古くは国司が管理していた公田を指したが、後に荘園化した。

(11) 別符…平安時代～鎌倉時代に成立した土地制度の一つ。既存の国衙領や荘園に付属する一部区域が、国司の免符などを受けて単独の所領として分化したもので、各地に成立した。

(12) 諸山…禅僧寺院の官寺制度における3段階からなる寺格のうち、五山・十刹に次ぐ格。

萩藩の永代家老家となります。この時まで、益田本郷地域は益田氏の本拠三宅御土居と七尾城を中心に栄え、益田川・高津川の河口域に集落跡や湊跡など多くの中世遺跡が確認されています。近年、中須東原遺跡・中須西原遺跡(中須町)や、中世今市遺跡(乙吉町)など港湾集落の遺跡の発掘が相次ぎ、古文書から指摘されていた、流通貿易に積極的に関与することで経済力を高めようとしたという益田氏の「海洋領主的性格」を、考古学からも裏付けました。併せて、これらの日本海交易を、匹見や美都の材木や都茂鉾山などの鉾物が支えていたことが分かってきています。

## (6) 幕府領・浜田藩領・津和野藩領の境界の地 — 近世(江戸時代) —

益田氏の移封後、江戸時代の益田市域は、まず、幕府領と津和野藩領(坂崎氏)とに分けられました。当初の津和野藩領は、ほぼ高津川より西側(高津などは幕府領)と種地区・北仙道地区・宇津川地区などに限られており、ほとんどが幕府領となっていました。しかし、元和2(1616)年に坂崎氏が改易され、翌3年に亀井氏が替わって入部、さらに同5年に浜田藩(古田氏)が成立すると、幕府領の村々はほとんどが津和野藩領と浜田藩領に編成され、幕府領は津毛(美都町山本)と匹見地区のみとなりました。これも天明5(1785)年には浜田藩領に編入され、津毛はいったん幕府領に戻りますが、天保13(1842)年に再び浜田藩領となり、幕末を迎えます。津和野藩では寛永14(1637)年、浜田藩では明暦4(1658)年に詳細な検地が行われて地方支配の基礎とされました。浜田藩主は松平(松井)氏、本多氏、松平(松井)氏、越智松平氏と変遷します。

亀井氏移封後の津和野藩は、藩内を14の組に分けてそれぞれに代官を置き、組内の村の庄屋との連絡にあたらせていました。益田市域では、時期により変遷がありますが、70前後の村があり、木部、黒谷、高津、横田、北仙道の5組が置かれました。各村には、庄屋、蔵方(出納を担当)、五人組頭などが村役を務めました。津和野藩が製紙業を振興していたこともあり、紙役という村役もありました。また、高津や飯浦が藩の重要な港に位置づけられ、問屋などが置かれて賑わいました。同時に、津和野藩の山間部の所領をつなぐ津和野奥筋往還や、津和野から桂平・美濃地を経て飯浦に抜ける街道などが整備されました。高津村の沖田は水が不十分であったため開発が遅れていましたが、長嶺嘉左衛門が蟠竜湖疎水を開通させることに成功し、新田開発が進みました。

浜田藩は、時期により変遷がありますが、益田市域に40強の村があり、その石高は13,000石程度でした。川役、山役、鉄山役、塩浜役、水夫役、浦役、舟役などが賦課されており、海、川、山、それぞれで産業が発展していた



写真 2-20 元和 4(1618)年前後作成の「紙本著色石見国絵図」(一部抜粋)  
(浜田市教育委員会所蔵)

ことがうかがわれます。一方、益田氏が去った後の益田地区では、益田氏の旧臣右田宗味が、まちの寂れることを憂い、市を興したと伝わります。また、益田平野の低湿地が新田として開発されていきました。匹見では、藤井家や美濃地家が鉾山やたたらたたらの経営を展開し、現存する旧割元庄屋美濃地屋敷が当時の繁栄を伝えています。

津和野藩・浜田藩は、ともに製紙・製蠟を奨励しました。匹見地域や美都地域では、山林資源が豊富なことから、たたら場が多く、井野村(浜田市三隅町)から砂鉄を運んで経営され、製品は加計(広島県安芸太田町加計)や益田へ搬出されました。匹見川では鮎漁も盛んに行われました。

幕末、第2次幕長戦争(石州口の戦い)では、扇原の関門での戦闘を皮切りに益田の地で激戦があり、慶応2(1866)年には長州軍が幕府軍を破って浜田藩領に進攻し、幕府領及び浜田藩領は、明治2(1869)年まで長州藩が支配するところとなりました。

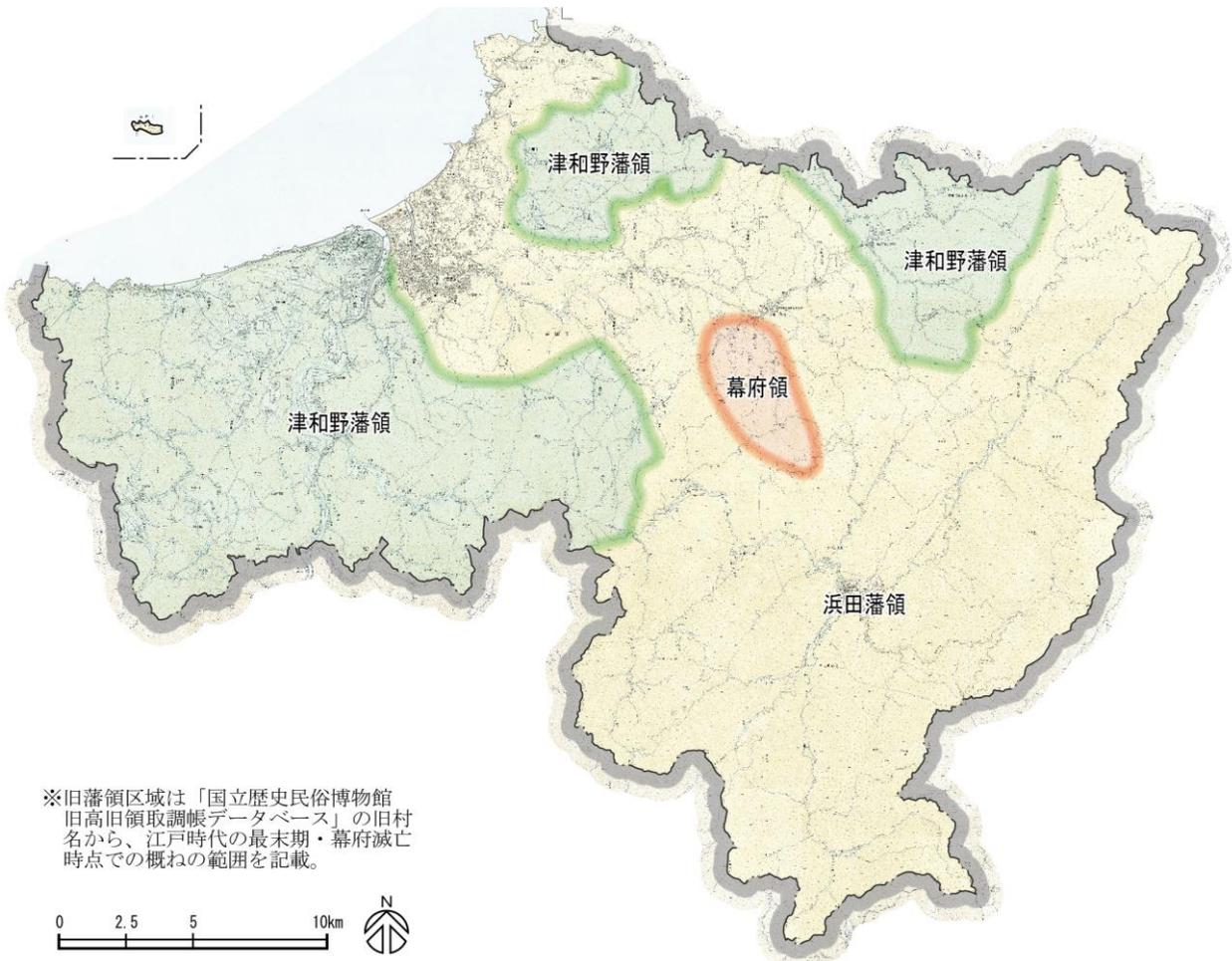


図 2-18 江戸時代中頃の幕府領・津和野藩領・浜田藩領の境界

## (7) 前近代の交通網の発展

前近代の益田の交通において、陸路では、沿岸部を北東方向から南西方向に結ぶ旧山陰道と、山間部を南西方向から北東方向に結ぶ津和野奥筋往還(石見中通り往還)が重要な街道でした。この2つの街道については、島根県が総合的・体系的な調査を実施しており、その成果が『島根県歴史の道調査報告書』として刊行されています。

旧山陰道がどのように整備されたかはわかりませんが、中世においても益田氏のもとを訪れた室町幕府の使者が、益田氏の家臣に送られて、おそらく津和野に向かう途中で青原に逗留

留しており(「益田家文書」614号)、中世の時代に旧山陰道の原型のようなものはあったと思われ、それが江戸時代に整備されたと考えられます。

江戸時代の旧山陰道の益田市に相当する部分は、次のような経路をたどります。まず、浜田市三隅町岡見の西ノ谷から益田市の土田町に入ります。これは、土田川にかかる馬橋の名前が当時の名残をとどめています。そして、上ノ谷の南を通り、鎌手峠を越えて、木部町に向かいます。次いで、木部町で沖田川を渡り、峠を越えて、津田川の河口に至ります。津田町からは鹿田の峠を越えて遠田町に至り、東方寺の裏を通り、双葉を経て、東町の辰の口の標柱の付近から益田地区に入ります。万福寺の門前を通り、益田川を渡って、幸町、土井町を経て多田町に至ります。多田町の扇原は、浜田藩と津和野藩の藩境であったため、関門が置かれていました。扇原からは、七曲がりまたは山中の道を通って左ヶ山町を経て、本俣賀町に至ります。さらに、梅月町から峠を越えて、横田町に出ると、石塔寺川が合流する付近で後川を渡りますが、何度か船橋がかけられたという伝承があり、現在架かっている橋も船橋と名付けられています。その後、横田の町を通って匹見川を渡り、高津川の東岸を南下し、三星から津和野町の添谷に入っていきます。

一方、津和野奥筋往還は、津和野藩が美濃郡、那賀郡、邑智郡の各所にある飛び地の藩領を結ぶために整備されたと考えられます。津和野奥筋往還は、津和野藩の城下町津和野を起点としていますので、南西方向から見ると、津和野町須川から相撲ヶ原、滝谷を下り、渡し船で匹見川を渡り、益市長沢町の西長沢に入ります。次いで、山を越えて同町東長沢を経て、波田町に至り、波田町から藤ヶ峠を越えて、美都町大神楽を下り、都茂に至ります。都茂からは、丸茂、宇津川、板井川を経て、浜田市弥栄町の田野原に抜けます。

また、石見銀山代官所の役人が使ったとされるのが石見中通り往還で、基本的には津和野奥



図 2-19 近世の主要な往還道

筋往還と重なります。やはり、江戸時代以前からその原型となる道があったものと思われます。

この他、主要な街道では、津和野藩の主要な鉱山である畑ヶ迫鉱山などと、桂平町から美濃地町を経て、港町の飯浦とを結ぶ街道や、益田から波田町の波田上、匹見町の澄川、匹見を経由して、広島県廿日市市の吉和に抜ける石見安芸道などがありますが、これらについては、今後の調査が待たれます。

## (8) 内陸水運と海運の発展

前近代の益田の交通においては、陸路だけでなく、海路や河川が重要な役割を果たしていました。前近代以来、益田の人々は、日本海を通じて積極的に国内外の各地域と交易・交流を行っていました。江戸時代の海路では、西廻り航路の中で、高津や飯浦が津和野藩に、今市が浜田藩に重視されていましたが、この他にも、土田・大浜・木部・津田・遠田・中須・小浜などの港も、廻船業の拠点となっていました。

高津川・匹見川や益田川のような大きな河川は、流通路としても重要な意味を持っており、中世の時代にも下流域・河口域で通航料が徴収されていたことがわかっています。写真 2-21 は、津和野町青原での明治頃の高瀬舟の様子ですが、このような高瀬舟による河川流通が前近代の益田市域でも行われていたと考えられます。



写真 2-21 明治頃の津和野町青原の高瀬舟

(写真提供 津和野町教育委員会)

## (9) 近代化と過疎 — 近現代(明治・大正・昭和・平成) —

明治 2(1869)年の版籍奉還により津和野藩主が藩知事に任命され、津和野藩以外の石見国は<sup>おおもり</sup>大森県となりました。大森県は翌 3 年に浜田県と改称、さらに、同 4 年には津和野藩が廃されて浜田県となり、同 9 年には第 2 次府県統合により島根県に合併されました。

その後、明治 22 年の町村制施行により、益田地域で 1 町 14 村、美都地域で 3 村、匹見地域で 3 村が成立しました。昭和 27(1952)年には、益田町を中心として益田市が誕生し、昭和の大合併により市域を拡大しました。美都地域・匹見地域においてもそれぞれ 3 村が合併し、同 31 年には匹見町が、同 32 年には美都町が誕生しました。

交通網では、大正 12(1923)年には山口線が開通、山陰本線も延伸して、石見益田駅が開業しました。鉄道の枕木需要から山間部では製材業が栄え、匹見川を利用して搬出されましたが、同 15 年に匹見町から益田へ架設された 8 ヲ所の駅を経由する総延長 29.9 km の索道が、馬車で



写真 2-22 妙義寺観音堂より益田平野を望む(昭和 8 年頃)

2日を要した距離を5時間で結びました。これにより、1日平均38tの物資が搬出されましたが、奥部への道路網整備が進み自動車輸送が発達すると、昭和26(1951)年に全線が廃止されています。さらに、明治22年には山陰道が改修され、同26年から益田川沿いに整備が進められていた往来道は、大正12年には県道に、昭和39年には国道191号に昇格するなど、昭和30年以降、国道9号や国道191号の各バイパスが建設されています。

交通網の整備に伴い経済活動の中心が益田駅付近に移行するにつれて吉田地区が発展しました。昭和40年代以降は商業団地の造成、大型店や諸官庁の進出などによってまちは一変し、運動公園や陸上競技場などの体育施設、雪舟の郷記念館や高津柿本神社を取り込んだ県立万葉公園などの文化施設の整備も進められました。平成5(1993)年には、内田町の丘に県営石見空港(通称:萩・石見空港)が開港し、東京や大阪との距離を短縮しました。

一方で、昭和30年代のエネルギー革命により、木炭の需要が大きく減少し、炭焼きなどによる山間地における生業が成り立たなくなっていくます。同38年の豪雪なども相まって、同30年代から40年代にかけて山間部では挙家離村が始まり、人口減少率が40~50%となる地域もありました。匹見町では、当時の大谷武嘉町長がこの「過疎」問題を積極的に訴え、過疎地域自立促進特別措置法の成立に貢献しました。これが故に、匹見は「過疎」という語の発祥の地とも呼ばれるようになりました。

美都町では、明治20年頃から都茂鉱山の稼働が再開され、昭和60年まで採掘が続けられました。この間、経営者はたびたび代わり、大正元年からはドイツ人のウルー氏が、その後、都茂鉱山株式会社、協和鉱業株式会社、中外鉱業株式会社、同社から分離した都茂鉱業株式会社へと変遷しました。

## (10) 益田市の歴史を活かしたまちづくり

昭和58(1983)年の水害では、益田川が氾濫し大きな被害をもたらしました。この災害復旧に際して、当時、県指定史跡であった三宅御土居跡を縦断する都市計画道路沖田七尾線が計画されると、遺跡を保存しようとする市民運動が起こり、益田市では、歴史的地区におけるまちづくりのあり方と、これを支える道路整備の方針を賢明に両立させる方策として、平成6(1994)年に「益田市歴史を活かしたまちづくり計画」を策定し、豊かな歴史と快適な現代社会とが共存する「中世文化の薫るまち」の実現をめざすことになった経緯は前述のとおりです。

その後、平成16年に益田市・美都町・匹見町が合併して現在の益田市となりました。同年、三宅御土居跡と七尾城跡が併せて「益田氏城館跡」として国史跡となり、平成26年には中須東原遺跡が国史跡になりました。



写真 2-23 三宅御土居跡と七尾城跡を望む



写真 2-24 中須東原遺跡を望む

これにより、現在、益田市では、「益田氏城館跡保存管理計画」「中須東原遺跡保存活用計画」など、個別の文化財に関する計画を策定し、これらの遺跡を一体的に整備することで、市全体を野外博物館に見立てるフィールドミュージアムの中核施設とする構想を持っています。

また、平成 17 年には、鳥根県芸術文化センター「グラントワ」が開館したことで、益田市のみならず、鳥根県西部の芸術・文化の発信拠点となりました。

## (11) 益田市の歴史の変遷

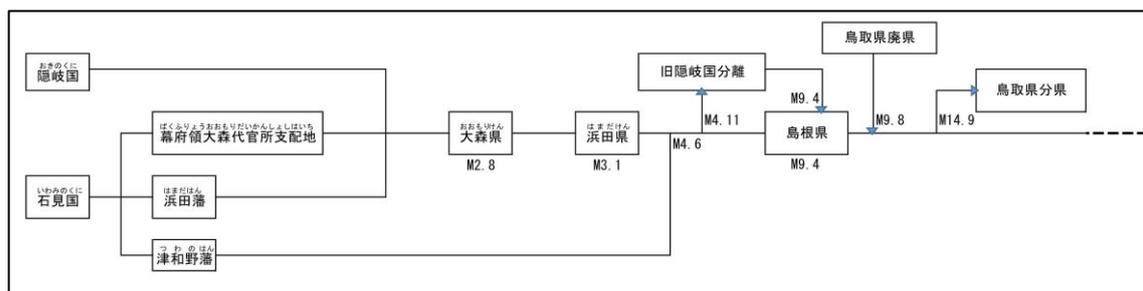


図 2-20 益田市域の変遷 1

益田市域は、時代によって異なるものの、江戸時代以前では、ほぼ石見国美濃郡に相当します。しかし、江戸時代になると、幕府領、津和野藩領、浜田藩領に分かれることとなります。その後、幕府領と浜田藩領は、幕末の第 2 次幕長戦争後に長州藩の統治下に置かれていましたが、明治 2(1869)年に大森県が設置されると、その管轄となります。そして、翌明治 3(1870)年には大森県は浜田県に改称します。一方、明治 4(1871)年には津和野藩が廃藩となり、その領域が浜田県へ編入され、明治 9(1876)年に浜田県は島根県に合併されました。

明治 5(1872)年の大区・小区制実施<sup>(13)</sup>の際には、益田市域は浜田県の第 4 大区となり、32 の小区に区画されましたが、明治 8(1875)年には 13 の小区に区画が変更されています。大区・小区制が明治 11(1878)年に廃止され、郡区町村編制法<sup>(14)</sup>（鳥根県は、明治 12(1879)年に施行）が施行されると、益田市域の町や村は美濃郡\*\*村(または\*\*町)と表記されるようになります。

なお、本計画では、近代以降の益田市域の町村称について、繁雑を避けるために美濃郡を省略して表記しています。

江戸時代の益田市域には、時期による変遷がありますが、120 弱の村がありました。その後、村の合併が進み、明治 8(1875)年には 75 村となり、明治 22(1889)年の市町村制施行時点では、1 町(益田町)と 20 村(吉田・高津・鎌手・安田・種・北仙道・豊川・真砂・豊田・高城・二条・小野・美濃・中西・東仙道・都茂・二川・匹見上・匹見下・道川)となりました。

現在の公民館や地区振興センターは、この明治 22 年時点の町村の単位及び呼称が残ったものです。

大正 11(1922)年には、高津村が高津町となり、町制を施行し、同様に、昭和 9(1934)年には、吉田村が吉田町となりました。その後、益田・吉田・高津の 3 町は昭和 16(1941)年に合併して石

<sup>(13)</sup> 大区・小区制…廃藩置県後、政府によって新しく定められた地方行政制度。戸籍法に基づく戸籍事務遂行のため、新しく区を設定し、戸籍吏として戸長・副戸長を置いた。また、旧町村役人(名主・庄屋など)の廃止と区政による統一が命じられた。数カ町村を併せて小区を作り、数カ小区を併せて大区とし、大区に区長を、小区に戸長を置くのが一般的とされる。

<sup>(14)</sup> 郡区町村編制法…大区・小区制を廃止し、旧来の郡・町村(大都市は、区)を行政区画として復活させたもの。町村を自治団体とし、戸長の公選制、区町村会の設置を認めた。郡は行政機関とされ、官選の郡長が町村を監督した。

見町となります。この呼称は、合併前のどの町の名前も使わないという取り決めによるものでしたが、昭和 18(1943)には益田町に町名を変更しています。

昭和 27(1952)年、益田町と安田・北仙道・豊川・豊田・高城・小野・中西の各村が合併して益田市として市制が施行されました。続く昭和 30(1955)年には、益田市と鎌手・種・真砂・二条・美濃の各村が合併しています。

一方、東仙道・都茂・二川の 3 村は、昭和 29(1954)年に合併して美都村となり、昭和 32(1957)年には、美都町として町制に移行しました。また、匹見上村・匹見下村・道川村は、昭和 30(1955)年に合併して匹見村となり、昭和 31(1956)年には、匹見町として町制を施行しています。

その後、平成 16(2006)年に益田市・美都町・匹見町が合併し、現在の益田市になりました。

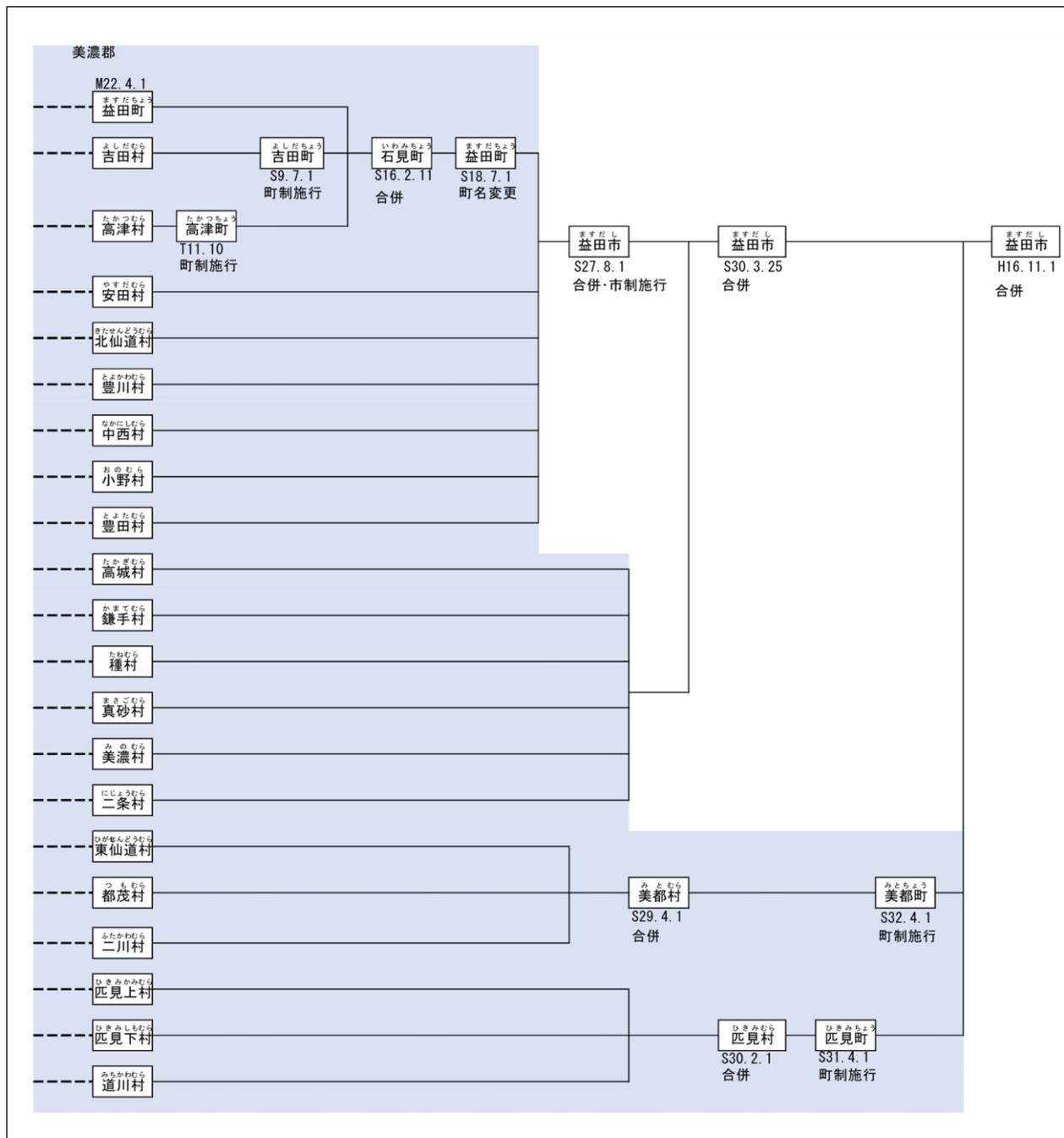


図 2-21 益田市域の変遷 2